『國民新報』1940年4月7日

[主張]　青年の道――ま違つた強がりと見榮を排せ[[1]](#footnote-1)

　まづ一にのとなるものは うやうやしさ、つゝましやかさである。のに あるときのであるが、われわれは どんなにも、このを たまほしきものである。しわれわれが、なる にいても、のにあることを れなかつたならば、このうやうやしさ、つゝましやかさを はぬであらう。そしてはず、をくとか、ふしだらなざまを しないであらう。かく『をむ』ことが にけば、からから、一種の々しさをするやうになつて、にしくもしいをへるやうになる。

　ところがのくはけからして だらしがなくて、ちきで、きがなく もものごしも、ひもでがない。このでを つたならば、してさるべきやにはなれないであらう。ものひのやうであり、そのは でなければ、となるのである。

　とはして だらしないことでもなければ、やなことではない。はにいて、うやうやしくて、虔しやかなこそ、なすべきこと、なすべきとじたには、ののでもでり、することもなければ、びくびくと えらないといふこともない。にしつかりと、きつぱりと、あつさりと、のく やつてのけるのであるが、これこそのとはいふのである。

　をじ、るをき、一つのに從つてするで あつてこそ、かゝるうやうやしさ、つゝましやかさと になさをすことがる。にをり、がりをひ、したことにもになるやうな、は ブリキのやうなもので、はさうでも、しいにつたが 、ぺちやんこにへこんで しまふものである。とと、これあつて、はじめてにいとなるものだ。

　のは、をふことである。をふは き、きなのだ。ききは、いつはりを さず、をさず、ふしだらをさず、りや、 をなめることをさない。しかもやにしてはとして として、して一もかないことをずるものである。、は このききよりするものであるが、こののちのは、にうやうやしさと つゝましやかさである。

　つたがりや、にされつゝあるののをむ。

1. この文章は一部「わかちがき」がなされている。 [↑](#footnote-ref-1)